

広報 Koho Gallery
展示室

第38回

浮世絵風景版画の歴史

浮世絵風景版画は、中国や朝鮮半島の山水画の影響を受け17世紀ごろから独自の画系を形成した。また、江戸時代は鎖国政策のもとに对外文化がほとんど流入することがなく、日本独自の文化が生まれた。特に平和を謳歌するようになった元禄年間以降の江戸は、町人文化が著しく発達し、浮世絵も独創的な江戸時代固有の文化のひとつとして発達した。浮世絵は時代の流行をいち早く取り入れ版画として売り出されていたが、風景画（名所絵）は美人画や役者絵と競べると非常に遅い展開をしていた。その理由の一つに西欧の風景画では当たり前前の透視遠近法の概念がなく、作品を制作しても歪んだ構図になってしまっていたことが挙げられる。

そのため風景版画が開花し始めたのは錦絵の黄金期といわれる天明・寛政年間（1781～1801）に人物の背景として風景が使用され始めてからである。美人や役者が野外でくつろぐ姿や名所地を行楽する姿の背景として描かれてから歪んだ景観構成は少しずつ改められていった。

文化・文政年間（1805～29）には葛飾派や歌川派の絵師たちが風景画を描くようになり、文政末に葛飾北斎が描いた「富嶽三十六景」により風景版画は大きく躍進する。この作品は江戸のどこからでも見える富士山を対象としたことや、諸国の名所地から見える富士山の景観を描いたことにより江戸庶民の間で好評を博し、予定の36図より10図多い46図で完結した。風景版画はこの作品を契機にさまざまな版元や絵師により制作されていったが、北斎の後継者となったのは歌川派の広重であった。広重は北斎より37歳若かったが、独創的な風景版画を模索した。四季、天候、時刻などを

— 秋季特別展 —

浮世絵版画の変遷展



葛飾北斎「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」川崎・砂子の里資料館蔵

加えることにより、抒情性のある新しいスタイルの風景画を確立し、北斎とは違った風景版画の制作に成功する。

この図は葛飾北斎筆「富嶽三十六景」の代表作「神奈川沖浪裏」で、不安定に重なる大波の間を木の葉のように舞う舟と、正面に見える静穏な富士山が対照的に描かれ、静と動の視覚的効果を十分に考慮した作品に仕上がっている。ただし、この作品は西欧の透視図法だけが用いられたのではない。そのため構図は前景の波から遠景の富士山まですべてにピントが合っている。従来の浮世絵の技法と西欧の遠近法の和洋折衷のような作品である。

那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 市川信也

【会 期】 ～11月24日（月祝）

【開館時間】 午前9時30分～午後5時まで
（ただし、入館は4時30分まで）

「広重紅葉まつり」関連の催しとして、美術館の無料開放を行います。

【無料開放日時】 11月23日（日・勤労感謝の日）
午前9時30分～午後8時

【対 象 者】 全来館者

【問い合わせ】 栃木県那須郡那珂川町馬頭116-9
那珂川町馬頭広重美術館 ☎0287-92-1199

すくすくの森

「ギャラリー邸」のご紹介

去る10月30日、すくすくの森の中にある「森林と緑の展示館」が「ギャラリー邸」として生まれ変わりました。

その「ギャラリー邸」で10月31日から11月9日まで開催された薄井裕写真展「花時の雨」の写真2点をご紹介します。

サザンカ



薄井裕

ミニ
ギャラリー



マンサク

薄井裕